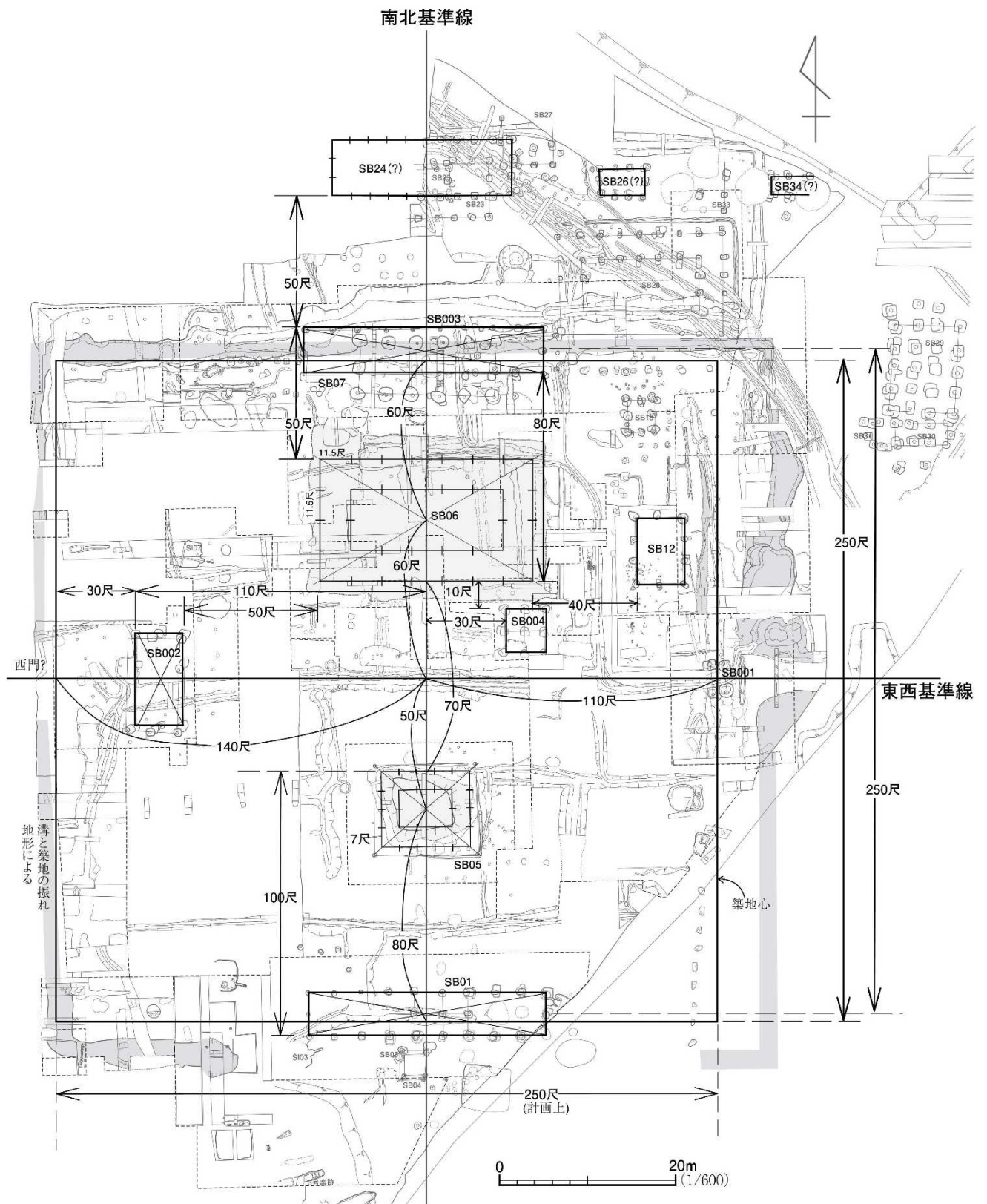


第 43 図 主要な遺構の配置図



第 44 図 上人壇廃寺跡の遺構配置計画（佐川正敏「上人壇廃寺跡の遺構配置計画について」『上人壇廃寺跡』須賀川市文化財調査報告書第 59 集、平成 23 年を基に作成）

■遺構の変遷

遺構の重複や堆積土中の遺物をもとに遺構の時期の前後関係を整理すると、史跡が存続した8世紀から10世紀の間に大きく4期の変遷をみることができます。

【創建以前】

寺院の創建以前の段階で、7世紀末～8世紀初頭頃に位置付けられます。竪穴建物跡S I 01やS I 02、S I 06などから構成されます。いずれも寺域の外側に位置することから、創建に関わる竪穴建物と考えられます。

【第I期】

寺院創建期です。創建期直前には2号瓦窯で創建期に用いた瓦の焼成が行われます。この瓦類や土器から8世紀前半頃の創建と位置付けられます。

一辺約80m(250尺)のほぼ方形を呈する区画溝を取り囲むように築地がめぐり、その中央部に金堂と考えられる基壇建物跡S B 05と、講堂と考えられる掘込地業建物S B 06、南門S B 01の八脚門が一行に並ぶ伽藍配置となります。また、築地に取り付く東門S B 001などもこの時期に作られています。



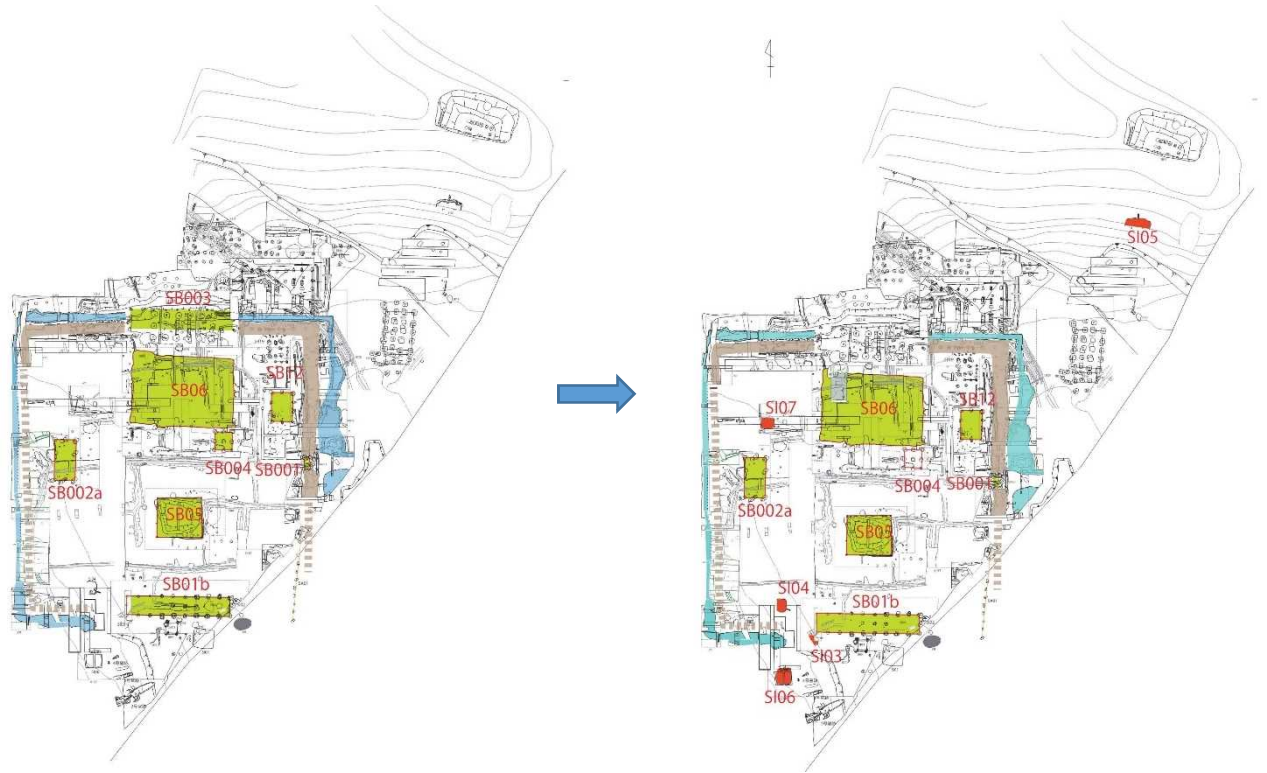
第45図 第I期の遺構

【第Ⅱ期】

8世紀後半の中心伽藍の金堂と考えられる基壇建物跡S B05と講堂と考えられる掘込地業建物S B06を軸に、寺域内での建物が最も整備された時期（第Ⅱ期）から、9世紀前半頃に伽藍の一部が火災に遭った時期（第Ⅱ期終末）です。

南門S B01と対称する位置の北側築地を取り壊し、僧坊と考えられるS B003が建てられました。S B01とS B003の中心に東門S B001があり、第Ⅰ期よりも東側を意識した配置です。S B06の東側にはS B12aが、S B06南東にS B004が、さらに西側中央部のS B001aと対称する位置にS B002aが配置されています。築地や区画溝は、北側はS B003に取り付き、その他は第Ⅰ期のままと考えられます。この時期に部分的に壊れた瓦を葺き替えており、Ⅰ期よりは范（瓦の木型）の傷が進んだ瓦を用いていました。

第Ⅱ期終末の9世紀前半頃に、S B003が火災に遭い焼失します。その後、再建や改修工事のために作業場的な竪穴建物跡S I03、S I04、S I05、S I07などが寺域内外に建てられました。S B004は柱を抜き取られ廃絶されています。



第46図 第Ⅱ期の遺構

【第Ⅲ期】

9世紀中頃から後半頃、伽藍を再建・改修した時期です。第Ⅱ期終末に焼失したS B 003に変わってS B 07が建てられます。このS B 07は主軸方位が東側に傾く建物跡で、これまでの真北方向とは大きく異なります。また、東辺と北東側の築地が崩壊し、柵列に改築されていました。さらに、S B 07の建設に伴って北側を廻る区画溝が建物を迂回するように付け替えられました。その他の建物も部分的な建て替えが行われています（S B 001b、S B 002b、S B 12b）。

【第Ⅳ期】

10世紀初めころ、寺院が衰退と終焉に向う時期です。これまで用いた中心伽藍が機能を失い、四面廂付建物S B 28がこれまでであった中心伽藍の北東側に作られました。これ以降、15世紀代まで当地での活動の痕跡が確認されていません。



第 47 図 第Ⅲ期・第Ⅳ期の遺構